

淫紋 屈服

EROTIC
TATTOO
SUBMISSION

金色のミルカ

ウナル
挿絵
Q



18
未滴

二次元ドリームノベルズ

試し読み版

淫紋 屈服

EROTIC TATTOO SUBMISSION

金色のミルカ

小説ウナル
挿絵Q



第一章	淫紋の罨	006
第二章	穢された血筋	049
第三章	公開拘束陵辱	090
第四章	堕ちた剣	130
第五章	雌奴隷の躰	171
第六章	狂宴の建国宣言	213

登場人物紹介

Characters



エカテリーナ・セラスヴィン
セラスヴィン王国の若き姫。



ミルカ・ユーディナ
セラスヴィン王国の騎士団長。



ヴァルバラ・ジュガー
放浪の剣士にして、ミルカの剣術の師匠。



ピュトル
セラスヴィン王国の大臣。

第一章 淫紋の罨

「姫様！ 今、参ります！」

遂に見えた反逆者の館にミルカはひた走る。

「来たな。ビュトル様はこの館の中だ。だが通しはしねえ。俺たちがいる限りはな」
門の前には動物を模したヘルムを被る男たちが壁となつて立ちはだかつていた。

猛獣騎士団。ビュトル子飼いの荒くれ騎士たちだ。

「そんな細い剣で鎧が斬れるかよ！」

振り下ろされたハルバードを避け、鎧の繋ぎ目にレイピアの切っ先を滑り込ませる。鮮血が散った。腋を裂かれた腕から力が抜けて武器が地面に滑り落ちる。

「こいつ鎧の隙間を！ ね、狙つてやったのか!？」

「気をつける！ そいつがミルカだ！ 金色こんじきのミルカだ！」

雲間から満月の光が差し、ミルカの姿を露わにする。

凜とした眉、凜とした目、凜とした口。そして黄金を溶かしたような金の長髪とそれを支える豊かな肉体美。

ミルカ・ユードイナ。

セラスヴィン王国の騎士団長を務める女騎士だ。

弱冠二十歳ながら強さは騎士団の中でも群を抜いており、『金色のミルカ』と国民に称されるほど絶大な人気を集めている。

もつともその人気は強さだけが理由ではない。ミルカはその美しさもまた騎士団で群を抜いていた。

思春期から急成長したその胸と尻は娼婦顔負けの豊満さだ。大きく開かれた胸元は丘のような曲線を描き、深い谷間は男が顔を埋めたとしてもなお底が見えないだろう。日々の鍛錬で鍛えられた脚線美も素晴らしく、鎧から覗く太ももは思わず頬ずりしたくなるほどだ。

その上、動きやすさを重視した鎧は徹底的な軽量化が施されており、胸や股間のごく一部以外は美しい肌を惜しげもなく露出させているのだから国民の妄想は止まらない。

とりわけエカテリーナ姫との主従関係は需要が高く、もはや一つの信仰として認知されているほどだ。

「雑兵^{ぞうひょう}では相手にならない！そこをどけ、逆賊どもめ！」

「女のくせに威勢だけはいいな。この人数だぜ？一体いつまで相手してられるかな？」

その言葉にわずかにミルカは氣勢きせいをそがれた。腐つても奴らは騎士団だ。実力はそこらのゴロツキとは比べ物にならないし、人数もざつと二十を超えている。一対一ならミルカも負けるつもりはないが、一斉に襲いかかられてさばき切れるかは怪しいだろう。

「この傷の代償は払って貰うぜ？ 裸にひん剥むいてエロい身体を犯しまくって——」
「相変わらず面倒な戦い方をしているな」

轟音が響き、衝撃に地面が震えた。土煙が晴れるとミルカに迫っていた男は鎧ごと真つ二つになっていた。

代わりにそこに立っていたのは黒いドレスに身を包んだ長身の美女だ。

「こんなもの、まとめて叩き切れればいいだろうに。時間の無駄だ。無駄」
意地悪な笑みを浮かべて美女が胸を張れば、目を疑うような巨乳がぷるんと震えた。そのサイズはミルカ以上だ。

彼女は名をヴァルバラ・ジュガーといった。

一見すれば、深紅の髪で片目を隠した麗人だ。豊満なボディと褐色の肌が相まって、剣よりもポールを握ってダンスをする方が似合いそうな色気がその身体から放たれている。

だが、その正体は世界でも最強と謳われる剣士だ。竜殺し、国崩しの剣、赤髪の魔人と
いった異名はその常識離れた逸話を想像させるに十分だろう。

彼女がセラスヴィン王国に流れ着いたのが一年前のこと。騎士団の指南役として迎えられたヴァルバラに、ミルカは文字通り死ぬほど鍛えられた。おかげでミルカにとってヴァルバラは、誰よりも尊敬する剣士であると同時にまったく頭が上がらない恐怖の対象となっていた。

「やれやれこの国は気に入っていたのだがな。まさか邪教に傾倒し、愚昧な野心を抱く者が出るとは。平和過ぎて人も人は腐っていくということか」

セラスヴィン王国は山と谷に囲まれた静かな小国だ。豊かな自然はそのまま天然の要塞となり、賢明な王と強力な騎士団を擁することもあって、五十年以上争いらしい争いを起こしていなかった。

だが今、セラスヴィンに未曾有の危機が訪れていた。

あろうことか大臣であるビュトルは王を殺害し、姫を攫うという暴挙に出たのだ。

「私のミスです。姫から目を離さなければこんなことには」

「ああ、その通りだ。お前のミスだ。とんだ失態だな。姫の身を守るべき騎士が、その時に傍にいなかったなど不覚の極みだ」

「はぐう！」

遠慮容赦のない言葉にミルカはその足をよろけさせた。伝説のドラゴンの爪でさえこれ

ほど鋭く心を切り裂かないだろう。

「だからこそ、お前が助けることだ。エカテリーナとは、長い付き合いなのだろう？」

「……僭越せんえつながら仕える騎士として以上の感情を持っています」

騎士であるという立場を抜きにしても、ミルカにとってエカテリーナはなくてはならない存在だった。二つ年下の彼女とは何かにつけて一緒にいたし、こちらの顔を見るなり駆け寄ってくる彼女を本当の妹のように思っていた。

だからこそ助けたい。エカテリーナはセラスヴィン王国に必要な人であり、絶対に守りたい家族でもあるのだ。

「ならば、こんなところでのんびりはしてられないな。さあ行つてこい。ここは私が掃除しておいてやる」

「ですが」

「心配するな。館に被害が出ないように手加減する」

怪しい笑みを浮かべるヴァルバラに心配するだけ無駄だったとミルカは苦笑する。

そうだ。ヴァルバラ・ジュガーが敗北するなどあり得ない。もし彼女にも勝てない敵がいるなら、それはこの世の誰も勝てない相手ということになってしまう。

「お任せします！」

ひらひらと手を振るヴァルバラにその場を任せ、ミルカは館へと駆け走る。背後では人が出す物とは思えない轟音が響き始めていた。

「姫！ エカテリーナ姫！」

館の最奥にある扉を開けた瞬間、猛烈な魔力の風がミルカの髪をなびかせる。

そこはもはや一つの異界と化していた。

真っ黒に塗り潰された床には十重二十重とえはたえの魔法陣が輝き、その上に邪悪な魔力が渦巻いている。その濃度は並みの人間なら呼吸すらできずに卒倒してしまうほどだ。

「遅かったな、ミルカ」

部屋の奥に一人の男が立っていた。まだ四十路よそじだというのに顔に刻まれた深い皺からは老けて見える。もはや本性を隠す気もないのだろう、大臣服は脱ぎ捨て怪しげな黒いロブに身を包んでミルカを出迎えていた。

「貴様！ エカテリーナ姫に何をした！」

ビュトルの腕には一人の少女が抱かれていた。白磁はくじのような白い肌。それとは対照的な艶やかな黒髪。その頭の上には王族の証である銀のティアラが乗せられている。手足には無駄な肉がまったくなく、人形のように美しい曲線を描いている。わずかに怯えているその顔さえ気品に満ち、裸であるにもかかわらず王族の風格を身に纏まとっている。

そう、その少女は裸であった。

わずかに膨らんでいる双丘の先端には、チェリーのような桃色の乳首が乗っている。下も何も穿かされておらず、髪と同じ色の縮れ毛がわずかに生えていた。そこも綺麗に整えているのかとミルカは意外な発見に意識を取られるが、すぐに首を振り怨敵に牙を剥いた。「落ちて書いてミルカ。私は平気よ。何も、されていないわ」

「姫様の言う通りだ。せっかく招待した姫君を慰み者になどせんさ。彼女の血はこの儀式の最後の仕上げだからな。もつともお前の態度次第ではどう転ぶかわからんがな」

「っ！ 痛う！」

ミルカに見せつけるようにビュトルはエカテリーナの胸を鷲掴みにする。節くれ立った指が白い乳房に食い込んでいく。その圧力に押されぷつくりと乳首が膨らんだ。乱暴な手つきにエカテリーナの顔が苦渋に歪む。

「ほほう、これが姫様の胸の感触か。サイズは物足りないが悪くない。柔らかできめ細やかで、まるで小鳥の羽を撫でているようだ。んん、いかがなされたエカテリーナ姫。息が乱れておいでですぞ？ ははははっ！」

上機嫌に笑いビュトルの指の動きにいやらしさが増す。わずかに勃起した乳首を指で押し込み、跳ね返る感触を楽しみ、さらには大きく円を描くように根元から揉み上げた。

ミルカの視界がかつと赤くなる。だがビュトルが短剣を取り出し、エカテリーナの頬に刃を当てるのを見せられてはただ唇を噛むしかない。

「動くなよミルカ。もし動けばこの刃が姫の首を切り裂くぞ。貴様も姫の血で服を汚したくはあるまい？」

「ミルカ。私に構わないで。守るべきは王ではなく国よ。私が死んでもセラスヴィンは失われぬ。今やるべきは反逆者に国を渡さないこと！」

「余計なことは言うな。さあ来い。後はこの魔法陣に少女の血を捧げれば儀式は完成する。これで俺は世界の支配者だ！」

短剣を握り締めたままビュトルは魔法陣に向かいエカテリーナを引きずっていく。

(どうすれば、このままでは姫が……いや待て、この状況を打開する手段はある！)

先ほどのビュトルの言葉。そして魔法陣を挟んで対峙しているという状況。今のビュトルは両手が塞がっている。やるなら今しかチャンスはない。

「動くなと言った！」

剣を握ったミルカにビュトルは短剣をエカテリーナに突き付ける。その切っ先が姫の喉に当たるより早く、ミルカの剣は自身の手の平を切り裂いた。

「——なっ!？」

「女の血が必要なのだろうか？　ならばくれてやる！」

魔法陣に飛び散る鮮血。明らかな動揺がビュトルの顔に浮かぶ。シヨックのあまりか姫の身体さえ腕から取り落としていた。

ミルカは一足飛びにビュトルとの距離を詰める。狙うは胸の中央だ。放たれた矢のように突進した剣先がビュトルの胸へと突き刺さった。

「ば、馬鹿なああああああああ！」

断末魔の叫びを上げ、ビュトルの身体が黒い霧となつて消え去っていく。やがて苦悶に歪んでいたその顔さえ宙に溶けていき、後には黒いローブだけが残った。

「消えた……いや、死んだのだな」

ミルカの手には確かな手応えが残っていた。どんな生物であろうと心臓を貫かれて生きていられるはずがない。ローブから剣を引き抜き、ミルカは踵かかとを返してエカテリーナのもとへと駆け戻る。

「エティ、無事？　痛いところはない？」

安堵のあまり、つい子供の頃の呼び名が口から出てしまった。しまったと口を閉じるがエカテリーナは無言で頷いてくれる。その顔にほっとする。ミルカは鎧のマントを外して剥き出しの肩にかけてやる。肌を隠すには心もとないが何もないよりはマシだ。



「よかった。では、姫……私は最後の仕事にかかります」

「ミルカ、あなたやつぱり」

「エティ。エカテリーナ。私はあなたのような主に仕えられたことを誇りに思います」

エカテリーナを見つめた後、ミルカは宙に渦巻く魔力へと向き直った。そこから感じる悪魔の視線に向かってミルカは両手を広げて胸を張る。

「邪悪なる悪魔め。私はここだ。身体でも魂でも好きにするがいい！」

姫を助けるためとはいえ、悪魔との契約に割り込んだのだ。初めから無事ですむなどと思っではない。だが、召喚された悪魔は何をするでもなくミルカを見つめ続ける。

「な、なんだ!？」

突然の風が部屋の空気を巻き上げた。強烈な魔力の奔流が部屋中を駆け巡る。立っているのも辛い風の中、ミルカはせめてエカテリーナを守ろうと目を開ける。その時、ミルカは確かに自分に向かい来る、黒い髑髏どくろの顔を見た。

「っ!？」

ぶわっと全身の産毛が逆立ち、鎧が軋みを上げた。ほんの一瞬の怖気。だがそれが過ぎ去れば、耳が痛くなるような静寂が部屋に残るだけだった。

「一体なんだったんだ？ 別に身体に異常はないが」

「ミルカが何も望まなかったから、なのかしら？」

「わかりません。しかし少なくともこの場にもうあの悪魔はいないようです」

先ほどまで部屋を包んでいた圧迫感はもうない。地に足がついている感覚は、この部屋にもはや何の魔力も働いていないことを示していた。

「お、ここにいたか。どうだ？ 格好よく姫を助け出せたか、勇者様」

「ヴァルバラ殿。ビュトルは倒しました。そちらは……問題なさそうですね」

「うむ。お前に稽古けいこをつけるよりは楽しめたぞ」

ふふんつと胸を張るヴァルバラ。その肩に担ぐ大剣には血やら肉やらがべつとりと張り付いている。

「これで全てが片付いたのだな。エカテリーナもよく頑張った」

「いえ、私は何も。ミルカが助けてくれましたから」

エカテリーナはぎゅつとマントを抱きしめる。その仕草だけでミルカは救われた気持ちだった。

「大変なのはこれからです。父の葬儀、大臣の人事、騎士団の再編成、他にビュトルの息のかかっていた者がいないかも調べないと。私ももう、姫ではいられませんね」

立ち上がったエカテリーナの顔には強い意志が宿っていた。父が殺され、長年仕えた大

臣に殺されかけたというのに、涙も見せずもう前を向いている。

(やはりエティは強い子だ。私よりもずっと)

守ることができてよかった。ミルカは心の底からそう思う。

「エカテリーナ女王の誕生か。ぷくくっ、このちんちくりんが王というものもなかなか愉快な話だな！」

「ヴァルバラ殿、流石に失礼です！」

思わず叫んでしまうがヴァルバラには梨のつぶてだ。まるで猫のように目を細めて笑う彼女に、ミルカもムキになって噛みつくがどこ吹く風とヴァルバラの笑いは続く。

「ふふっ、気にしないでミルカ。ヴァルバラ様のこういうところが私は好きですから。それに私の身体に威厳が足りないのもわかっています。背も低いですし身体つきも。私もミルカくらい、立派だったらなあ」

「？ よくわかりませんが、身体を鍛えるのならば協力いたしますよ？」

「自覚がないというのも残酷なものだ。まあ私の方がサイズは上だがな！」

誇るようにヴァルバラは腕組みして自身のバストを乗せた。ぶるんつと大きく波打ち、腕周りを全て覆い隠してしまう爆乳。ここまで来るともはや肉感の暴力だ。

「ああそうだ。私はこの国から出る。後はお前らで頑張るのだな」

腕から胸を下ろし、思い出したかのようにヴァルバラは言い放つ。剣を鞘に納めたヴァルバラはそのまま市場にでも行くように背を向け歩き出してしまふ。

「ヴァルバラ殿！ 行つてしまふのですか!？」

「今すぐにですか？ せめてお礼をさせて貰つてからでも」

「やることはやったし、私は元来根無し草だ。むしろこの国には長居し過ぎたな。エカテリーナの女王姿が見られないのもつたない気もするが。なんだ寂しいのか？ ふふんっ、せいぜいこの一年のことを思い返し、私の存在の大きさに涙するがいい！」

「っ！ 待って！」

思うより先に身体が動いてミルカは彼女の手首を掴んでいた。ゆっくりと振り返つたヴァルバラは、滅多に見せない真剣な顔でこちらを睨んでくる。

「ヴァルバラ殿。次は、次は絶対に勝つてみせます！ この一年、一度もあなたには勝てなかつた。だが次こそはあなたを倒してみせる！ みせます！」

あるいはビュトルと対峙した時よりも真剣にミルカは赤髪の師匠に想いをぶつけた。

「——何を言うかと思えばそんなことか。お前が私に勝てるわけないだろう。だが、その思ひ上がりを叩き潰すために、またこの国に戻つてこなければいけないな」

氷のように固まっていた表情が緩む。わっはっはっ、と豪快な笑いを上げながらヴァル

バラは館から去っていく。

小さくなつていく背中をミルカは見つめる。今は遥かに遠い、だが絶対に追いつけないとも思わない。

「また会えますよ。あんな態度してますけど困った時には絶対に現れるヒーローみたいな人ですから」

「そうですね。さあ戻りましょう。そんな格好をいつまでもさせてもらえません」

エカテリーナをマントに包み、ミルカは王都への道に戻っていく。

その下腹部で黒い痣あざがわずかに浮かび上がっていることには、最後まで気づくことはなかった。



それからのセラスヴィン王国は上を下への慌ただしさだった。

前王の葬儀。内政の整理。騎士団の再編成。姫の即位発表。戴冠たいかんしき式も先送りになり続け、一ヶ月経った今でもエカテリーナは『姫』のままである。

また、この機に乗じてセラスヴィンに攻め込もうとした隣国がことごとく謎の襲撃を受

けて壊滅したと風の噂で聞いた。そこでは両手剣を片手に暴れ回る赤髪の女が目撃されたとか。

セラスヴィンはエカテリーナの下で、新しい形に生まれ変わろうとしていた。

そんな中、ミルカは――

「ミルカ。騎士団の指導、お疲れ様」

「っ！ エ、エカテリーナひ……女王様」

昼の訓練を早めに切り上げ、足早に自室に向かっていた矢先にエカテリーナと出会ってしまった。屈託のない笑みを浮かべる彼女に安堵を覚えると同時に、心の中の危機感が際限なく膨らんでいく。

「まだ姫ですよ。それに二人だけの時はエティって呼ぶ約束でしょ」

「あ、ごめん。エティ」

「うん。よろしい。でもようやく戴冠式の日取りが決まったの。これでようやく私も一人前の王様ね。式にはミルカにも騎士団の代表として列席して貰うことになるわ」

その場でくるりと一回転してエカテリーナは満面の笑みを浮かべる。姫としてははしたないことであるのだが、自分の前でだけ見せてくれるこういう自由な姿をミルカは好ましく思っていた。

普段なら何のこともない日常の一コマだ。だが今のミルカにはこれ以上ない緊急事態だった。

「? どうしたのミルカ。顔がラズベリーのようになっ赤いわよ」

はっと気づき、思わず顔を手で隠す。その手の平も汗だくになっていることに自分自身で驚いてしまう。

「こ、こ、これは訓練後だからです。汗をかいたから……」

「そう? それではお願いね。騎士団長様」

まったくの不意打ちでエカテリーナが手を取り、指を握り締めてきた。

瞬間、抑えてきた快感が一気に爆発してミルカの身体を駆け巡る。

「~~~~~っ!!」

指先の柔らかな感触を引き金に、痺れるような感覚が広がっていく。胸の乳頭が肌着から浮き出すほどに張り詰める。首から上った血流が耳まで真っ赤にさせて意識を殴りつけてきた。そして下腹部に大きな波が襲いかかる。

(ダメだ! エティが見ているのにつ!)

太ももを内側に寄せて快感の波を抑え込む。緊張に足が笑うが何とか平静を装えた。

「お、お任せ……ください……エティ」

「ええ。よろしくね。ミルカ」

上機嫌に歩き去るエカテリーナ。その背中が廊下に消えたのを見届けると、ミルカは壁に身体を預けてしまった。腰が抜けなかったのは不幸中の幸いか。

壁に手をつきながら自室へと転がり込む。

扉に鍵をかけた安堵に足の力が抜けて、その場にへたり込んでしまった。

「気づかれなくてよかった。ふっ、くうっ……ど、どうしてこんな」

震える指で留め金を外して鎧を脱ぎ捨てる。大切な鎧を床に放り投げるなど騎士としてあつてはならないことだが、今はそれを考慮する余裕すらない。

「くっ、先が擦れて……っ！」

まるで毒でも受けたように胸の先端が熱く張っているのを感じる。指先も敏感で、普段意識しない布地の厚さや質感まで鮮明に感じ取れてしまう。

「はあはあ……汗がこんな……それに匂いもこもっている……」

手袋と脚絆きゃはんもベトベトで、むっとする汗の匂いの中からこみ上げている。

そして上着も完全に脱ぎ去ると、自身でも驚くほど豹変ひょうへんした自らの身体が露わになる。

「これが……私の身体なのか……？」

豊満な乳房の先端にある乳首はつんと上を向いて張り詰め、呼吸と共にぐつと前に押し

出されていく。股間もびしょびしょに濡れていて、髪と同じ金色の茂みが昼の日差しに輝いていた。

なるほどエカテリーナの言うラズベリーという表現も間違いではないと思う。熱く火照ったこの肌は、まさしくベリーののように真っ赤だ。

「最近はずっとこんな調子だ。一体何なのだ。私がこんな……身体を欲情させるなど」

思い当たる節などなかった。以前と違う点があるとすれば下腹部についた痣だが、騎士団の訓練をしていれば痣ができるのは当然だし、こんなもので身体がどうこうなってしまうとはとても思えなかった。

ふーっふーっど荒い息をつきながら、ミルカはベッドの上に転がる。真っ新なシーツが汗を吸い、あっという間に湿っていく。

「おさまれ……おさまれ……っ！ 私は騎士団長だ。肉欲に屈しなどしない！」

祈るように呟きながら目を強くつぶった。身体を丸めて怯えるように時間を過ごす。せめて眠ることができればよかったのだが、頭の中はやたらに冴えわたって眠気の一つも襲ってこない。

（姫様の、エティの指……柔らかかったな）

わずかに薄れた意識の中で、久々に感じたエカテリーナの感触が思い返される。

彼女は幼い頃とまるで変わらない。赤ん坊のような柔らかかですべすべの肌触りだ。触れ合っているだけでほっとさせてくれる人など、ミルカはエカテリーナの他に知らない。

（もしあの指先がここに触れたら、どんな感じなのだろう。私の指は硬いし武骨だから、きつと今とは比べ物にならないくらいに気持ちいいのだろうな）

はしたないほどに大きく育った胸にミルカは表情を硬くする。十歳の時から急成長を始めたこの胸はミルカのコンプレックスの一つだ。訓練中も服の中でプルプル震えて邪魔だし、街を歩いているだけで男女問わずに奇異な目で見られてしまう。今の軽装鎧を着るようになったのも、既製品ではすぐにサイズが合わなくなってしまったという事情があった。いつそヴァルバラのように開き直つてしまえば気も楽になるのだろうが、騎士としての誇りがそれも許さない。

（こんなだらしのない身体なのに団長として取り立ててくれたエティには感謝してもし切れないな。あの子だけは私を受け入れてくれるんだ。ああ、エティ。エティ。して。して欲しい。私を慰めて欲しいよ）

無意識のうちに乳房を掴んでいた。自身の硬い指の感触が少し寂しい。それでも心地よさを求めて、ミルカはエカテリーナの姿を妄想する。あのシルクのような肌が自分を愛撫しているとイメージして乳房の先端に指を這^はわす。

「はあはあ……いけません姫様……私はあなたに忠誠を誓った騎士で……あんっ」
ぎゅつと布越しに乳首を摘まんだだけで、まるで全身が撫でられたような快感が広がる。
熱い息をつきながら、ミルカは右に左に寝がえりを打って快感を逃がす。

（この声は……修練が終わった後も自主的に鍛えているのだな）

窓の外から聞こえてくる素振りの音とかけ声にミルカは笑みを浮かべる。ビュトルの謀反^{むほん}以後、ミルカは騎士団のさらなる引き締めのために訓練内容を厳しくしていた。それを部下たちは文句を言うどころか、次こそは姫のために戦えるよう自主訓練を増やして身体を鍛えることに励んでいる。

（いつか褒美を渡したいな。そういえば身体を褒美として与える女騎士もいると聞くが、彼らもそういうことは嬉しいのだろうか。い、いや何を考えているんだ私は！）

慌てて浮かんだ考えを否定するも一度始まった妄想は止まらない。騎士団の宿舎で自分が部下たちに囲まれているところを想像する。鼻息の荒い男の視線で見つめられる中、焦らすように服を一枚、また一枚と脱いでいく。そして裸となって部下たちの下半身へと顔を擦り付けるのだ。

そこにある「男のモノ」については知識不足で想像すらできないが、きつと素敵なものなのだろうと勝手に決めた。訓練で嗅いだ彼らの体臭を思い出す。女の自分とはまったく

別の形の逞^{たくま}しい男の体型を思い出す。

（ああ、汗に塗^{まみ}れた身体でそんな。くつ、鍛えられた逞しい指だ。これをここに入れられたりしたら……どうなってしまうんだ）

くちゅつ。

「ひゃんっ!!」

触れた右手に熱いものが触れてミルカは思わず声を上げてしまった。

（やはりすごく敏感になっている……溶けた鉄のように熱くつてとろとろで）

濡れた秘所を指先でなぞる。くすぐったいような痛いような不思議な感覚。それは次第に堪え切れない快感になっていった。一番気持ちいいのはパンパンに膨らんだクリトリスだ。最初はそこには触れず、濡れた溝をひたすらなぞり、我慢できなくなったところで一気に掴むと――

「んにいいいいっ！こ、これが好きだ！」

仰向けになったまま腰が天井に向かって浮き上がる。クリをぐりぐりとこねれば、頭の線が切れてしまいそうなほど気持ちいい。

「ああ、もつとしたい。口も、胸も、アソコももつと……あ、ああんっ」

もはや声を殺すことも忘れて、夢中で胸と秘所を弄^{いじ}っていた。胸も恥丘も炎のように熱

い。このまま触れていたら手と乳房が一つに溶け合ってしまったいそうなほどだ。ごくりと息を呑み、下の口到人差し指を入れる。

指が膣口へと入った瞬間、下腹部の奥から溜まった蜜が一気に溢れてきた。

「く、来る！ 来るう！ あ、ああんっ！」

ぷしぷしと音を上げて手の平に熱い飛沫が噴きかけられる。その勢いを止めないよう乳房を揉みしだき、膣の奥に指を押し進める。

「はあ、ああんっ！」

膣がぎゅつと痙攣し、甘噛みするように指を締め付けた。自ら進んで腰を前後させ、ミルカは秘めたる快感を全て股間から吐き出していく。

痺れるような刺激が何度も身体を往復する。自分の立場も状況も忘れて気持ちよさに没頭できるこのひと時をミルカは噛み締める。

「はあはあっ……す、すごかったああ……」

一瞬、意識が飛んだ。多少熱が冷めた頭で自身の身体を見てみれば、乳首は苺のように硬く勃起し、陰唇も完熟の果実のように真っ赤になっていた。

「うっ、まだ疼いて……まだ足りない」

一度絶頂を味わったくらいではこの身体はおさまってくれない。むしろさらに敏感にな

つて快感を求める自身の膺と胸にミルカは恐ろしささえ覚える。

だが同時に張り裂けそうなほどの期待もあった。

軽く膺を擦っただけであれだけ気持ちよかったのだ。もしこのまま弄り続けらればどうなるか想像もつかない。鍵のかかった宝箱を前にしている気分だ。鍵穴を回すべく、ミルカは指を再び股間に這わせる。

「まさか騎士団長様が姫や部下をネタに自慰をしているとはな。くくっ、真面目な奴ほど変態的な願望があるというがまさにそれだな」

「——っ！」

扉に鍵はかけたはずだ。誰かが入ってくる音もしなかった。まるで湧いて出たように部屋の端に巨軀きよくの男が立っていた。

「この一ヶ月、なかなか楽しませて貰ったぞ、ミルカ」

「ビュトル!？」

反射的に仇敵きゆうてきの名を呼んでいた。だが、その男は記憶にあるビュトルの姿とはあまりにかけ離れていた。

自分と大差なかった背丈が天井に届く巨体となり、細腕も巨木のような太さに変貌へんぼうしていた。何よりその全身から放たれる存在感が段違いだ。まるで燃え上がる炎のようにただ

立っているだけで目が離せなくなる。

「死に損なつたか悪党め！」

思考を止めていた自分を叱責し、ミルカはベッド傍に転がっていた剣へと手を伸ばす。だがその指が柄に届く直前に「パチンツ」とビュトルの指が鳴らされた。

ずぐんつ。

下腹部を木槌で叩かれたような衝撃が全身に走る。だが痛みや苦しみではない。絶頂した時と同じ、指の先まで痺れるような甘い快感だ。

「かつ、はあ！ な、なんだこれはっ!？」

快感のあまり身体が反り返る。収縮した膣が愛液を絞り出し、濡れていたシーツをさらに湿らせていく。元々オナニーアクメをしたばかりの敏感おマンコだ。突如として襲った快感に堪らず音を上げ、高潔な女騎士の下半身から淫乱な雌の股間へと押し戻されてしま

う。
「くくつ、敵の目の前で恥ずかしげもなく汁を垂らすとはな。どうやら『淫紋』はしっかりと刻まれたようだな」

「い、淫紋、んっ、だとお……っ」

聞くだけで耳を孕ませられそうな響きに背筋が凍る。それでも奥歯を噛み締めてビュト

「はははっ！ 指でイキおったか！ あのミルカが陰核を摘ままれただけではしたなく潮を噴くとはなあ！」

「き、貴様何をした！ こんな……ひっ……おかしな身体に！」

「そうだな。どれ、見せてやるか」

余裕の態度でビュトルはミルカの腹に向かい手をかざした。途端にアクメとはまた違う熱さがミルカの腹で渦を巻く。

「痣が集まって……熱い……」

あの夜にできたわずかな痣。それがまるで生きているかのように腹上を駆け巡り、ヘソ下に模様を描く。そして焼けつくような熱さと共に青黒い色合いからルーージュ色へと変化するれば、まるで紅で引かれたハートマークのような紋様もんようが完成する。

『淫紋』。悪魔たちが人間を屈服させる時に使う呪術よ。そしてこの淫紋の主は俺だ。今やお前の身体は俺の所有物というわけだ」

「何を馬鹿な。そんなことが——」

「もう一度アクメしろ」

ビュトルが淫紋に向かい『命令』する。

それでお終いだった。

「はぐつ！ ああああああああああつ！」

再び快感が全身を襲う。自分がじつくりと愛撫して至つたのと同じくらしいの心地よさ。それを触れもせずたった一言で味わわされた。ビュトルの言葉に偽りがないと理屈ではなく理解させられる。この刻印は本物だ。

「口からよだれまで垂らしてよがるとはな。これでは俺の指で直接弄られたら壊れてしま
うかもしれない」

「や、やめろ！ 汚らしい指で触れるな！」

伸ばされてきた手を慌てて両手で掴む。その手触りにミルカは目を見張る。まるで岩
全力の抵抗を意に介さないその精強さは、騎士団の力自慢たちを優に超えている。これほ
どの力を持つ者をミルカはヴァルバラの他に知らない。

「いい形だ。まるで真つ白な桃の実だな。それがぱっくりと開いて赤い果肉を露出させて
いる。さあミルカの恥肉はどんな感触だ？」

くちゅつ。

熱い火照りに指が触れ、背中にぞくぞくとした感覚が広がる。

ただ触れられたただけだというのに、身体中が期待しまくっているとわかる。

(ち、違う……断じて私は求めてなどいない)

必死に心の中で否定するも、ミルカはビュトルの指先から目を離せずじいた。すりすり
と溝をなぞる動き一つも瞳で追ってしまい、次にどんなことをするのか予想せずじいられ
ない。そんなミルカの視線に気づいているのか、ビュトルはあのないやらしい笑みを浮かべ、
舌なめずりまでしてみせた。

「あ、ふああ」

ぬぷうつ。くちいつ。

いきなり二本入れられた。束ねた中指と薬指がヴァギナを押し広げ、膣の奥へとねじ込
まれる。太い指の節がごりごりと膣壁ちつへきを擦り、体内の肉に指が食い込む。

(じ、自分でするのはこんなにも違うのか?)

指を入れられただけで腰が笑ってしまう。いつもと違う太さと感触、そして次にどんな
動きをするのか予想が付かない。それはオナニーでは絶対に得ることのできなかつた新鮮
な刺激だった。

「ふふ、熱いぞミルカ。このまま指が溶けてしまいそうだ」

「な、なら……あつ……早く抜くがいい。んくつ、火傷をしても知らんぞ！」

「それは光栄な話だ。指を掲げて国中に自慢してやろう。この火傷は騎士団長ミルカのお
マンコで負ったのだとな！」

「ふあつ、ああつ、やめろ、そんなに激し……くはああつ！」

くちゅっ！ ちゅぐっ！ ぐちゅぐちゅっ！

食らいつくような勢いでビュトルは腕を前後させる。指が膣内を大きく前進し、壁に押し付けながら抜いていく。ごりごりと膣壁のヒダが擦り上げられ、その刺激が全身へと広がっていく。意識を刈り取られるような快感だった。

（そ、そんな奥まで!? し、知らない！ 私はこんなこと知らない！）

自分では恐ろしくて触れられなかった膣の奥の奥。そこにビュトルの指は悠々と届いてしまう。未踏の部分を擦られる初めての刺激に全身の毛が逆立った。

「何という蜜の量だ。手首まで濡らして悦んでいる。どうだミルカ、この指の味わいは？」

「き、気持ち悪いだけだ」

「そうか。ならもつとよくしてやろう」

「ふぎゅうっ!？」

空いていた奴の左手が陰核を押し潰す。痛いほどの快感にビクンと腰が跳ね、膣内の指を暴れさせてしまった。

「はははっ！ 今の声はなんだ！ まるでカエルでも踏み潰したようだったぞ！ しかもまだ皮も剥けていないな。この程度の状態であれだけ乱れていたとは驚きだ。どうやらお

前は根っからの淫乱のようだ。どれ、お前の剣を鞘から抜いてやろう」

そう言い、ビュトルは左人差し指をクリにぐりぐりと押し付け始めた。その間にも膺への愛撫は続けられ、二重の刺激にミルカは背中を反らす。

「んぐうううつ。や、やめ、やめろビュトルう！」

声と手で必死に制止を求めるも、ビュトルの腕は止まらない。太い指先に反してその動きは繊細かつ強烈だ。

「ここを感じるのだろう？ お前の弱点は全て知っているぞ。なにせここしばらくのオナニーは全て見させて貰ったからな」

「な、何を言ってる……ひつ、そ、そこ！」

右手の指がミルカのGスポットを狙い澄ます。ざらりとした壁部分に触れると稲妻に撃たれたように全身が震えてしまう。

「気づいていなかっただろうが、お前の行動は全て監視していた。お前が夜な夜なオナニーに耽^{ふけ}る姿も、騎士団員相手に欲情している姿もな。くくつ、さつき姫に手を握られてイキかけた時は笑いを堪^{こら}えるのに苦労したぞ！」

「な、なんだと！」

「貴様が思っていたほど俺は甘い男ではないということだ。ほれ、そろそろ剥けるぞ。し

っかりその頭に刻み込め。お前のクリを剥いてやったのはこのビュトルだとな！」

「あ、ひいん！」

ずるんっ。愛液を潤滑油にして股間の皮がずる剥けた。真っ赤な蕾つぼみが姿を露出する。冷たい空気に晒されてさらに敏感にそそり立つ。

「あ……ああ、こ、こんなに露出して……う、嘘だ……」

グロテスクに勃起したそれをミルカは自分のものと認めたくなかった。まるで肉でできた花の芽だ。それが鼓動に合わせてビクビクと震える様はいやらしく、とても人体の一部だと思えない。

「何を言っている。これがお前の本来の姿だ。恥ずかしげもなく勃起させているこれが、ミルカ・ユーディナのクリトリスというわけだ」

「ひぎい!! あ、あああああっ!!」

丸出しの蕾を指で摘ままれた瞬間、今まで以上の快感が下半身を駆け巡る。声を抑えるという発想すら浮かばなかった。反射的に首を反らし、ただ快感に歯を食いしばることしかできない。

「ははははっ! あのミルカがクリを摘ままれ乱れておるわ! そら、引き上げたらどうだ? 同時に膣もえぐってやるぞ!」

「や、やめ……ひいいいっ！」

力強く摘まんだままビュトルは左手を持ち上げた。陰核が引き伸ばされ、身体を半分に分かれるような痛みが走る。それから逃れるためにミルカははしたなく腰を突き上げてしまふ。しかしそれはビュトルの狡猾な罠だった。

体勢が変わったことによつて膣に入る指も刺激を新しくし、しかも奥の奥まで指を突き込まれてしまふ。クリをギリギリと引っ張り上げられながらの膣愛撫。もはやミルカは呼吸することもままならない。

「見事な腰振りダンスだぞミルカ。股間を見せつけながら汁も振り撒くとは恐れ入った。さあイケ！ 俺の指の感触を刻み込んでやる！」

「あ、あ、あああっ！」

がくがくと腰を踊らせ、ミルカは身体をブリッジさせて痙攣する。それがおさまった後も断続的に身体はビクつき、まともに動くことすらできなかった。指を引き抜かれるその動作すら途方もなく気持ちいい。いつそこのまま氣を失ってしまったいほどだ。

「部下たちが殺されているというのにいい気なものだな」

だがビュトルの発した言葉に、ミルカの意識が一気に浮上する。

「な、なんだと」

「お前の部下を殺していると言っているのだ。その目で見てみるか？」

ビュトルの巨腕に身体を持ち上げられ、ミルカはベッドの上に身体を起こされる。

そこに広がる光景を、ミルカは現実のものとすぐには認識できなかつた。

殺されたはずの猛獣騎士団が部下の騎士たちを虐殺していた。逃げる者は背中から斬られ、戦う者は囲まれ^{なぶ}斃り殺しにされている。仲間同士で殺し合いをさせられていたのは、まだ入団して間もない新米騎士たちだ。

「俺の魔術を使えば奴らを蘇らせるなど容易いことだ。どうだミルカ？ 部下が殺され助けを求めている中、俺の指でよがり狂っていた感想は？」

「——っ！ ビュトル、貴様！」

「動くな」

怒りのままに振り上げた拳が、たつた一言によって静止させられる。腹で^{らんらん}爛々と輝く紋章によって指先までも支配されているのだ。

「いい顔だぞミルカ。憎悪と屈辱を丸出しにした本物の憤怒の表情だ。その顔だけでも奴らを殺した価値があつたというものだ」

「殺す！ 殺してやる！ この逆賊、畜生、悪党！」

「仰向けになつて股を開け。自分で股間を広げて見せるんだ」

「っ！ ま、また身体が」

ミルカの意味を完全に無視して、操り糸に吊られるように身体が動き出す。ベッドに身体を横たえ足をM字に持ち上げる。

くにゆう。

指が柔らかな肉を広げてしまい、冷たい空気が流れ込んでくる。ヒクヒクと開閉する膣口をじつくりと眺められる。

「どうした？ 俺を殺すのではなかったのか？ それを、自らあそこを広げて欲しがるポーズを取っているとは傑作だ。クリトリスもこんなに尖らせ、膣からも蜜をだらだら流してベッドを濡らしているぞ。くくっ、アナルもヒクつかせているな」

気持ちで人を殺せるなら、胸に渦巻く憎悪はビュトルを百回殺してもまだ足りないだろう。だが目の前の悪漢はまったく平気な様子で股間に顔を寄せてきた。

「わかつてはいたが処女か。指で広げられればよくわかる。綺麗な膜が丸見えだぞ」

「見るな！ 見るなあ！」

「睨まれながら屈服の格好をさせるといっものは思った以上に楽しめるな。俺もそそられてるぞ。さて、そろそろいただくとするか」

ぶるんっ！

「――な」

目の前に出現したものに、ミルカは憎悪も忘れて呆然と口を開けた。最初は魔界から呼び出した異形の怪物か何かだと思つてしまった。それほど巨大な男性器だった。

「な、なんだこれは……こ、こんな、いや、おかしい！ だ、だつて！」

上手く言葉が出てこない。ミルカは男を知らない。殿方の生殖器についても棒状のものが付いているということくらいしか知識になかった。だがこれは明らかに異常だ。

言うならば肉で作られた槍先。

先端は赤黒くパンパンに張っている。太くなっている部分など人を殺せると思えるほど鋭い。一番先には縦の割れ目があり、透明な汁が湯水のように湧き出ていた。これが精液という物なのだろうか。

胴体もすごい。太さと長さも想像を遥かに超えて、まるで子供の腕だ。表面には太い血管が何本も走り根元まで続いている。それらがどくんどくと力強く脈打ち、別の生き物のように縦に首を振っている。

「このニオイは……く、臭い……っ」

つんと鼻をつく濃厚なニオイ。汗臭いとも生臭いとも違う独特の香りがビュトルの男性器からは発せられているのだ。とてもいいニオイとは言えないのに、ミルカはそれから目

を離すことができなくなっていた。

「悪魔の力を受けたペニスだ。サイズも量も常人の物とは比べ物にならないぞ。これをぶち込まれれば、もう他の男では満足できまいよ」

「ぶ、ぶち込っ!! ふ、ふざけるな! そんなもの入るはずが……ひっ!」

下腹部に擦り付けられる巨大な肉棒は淫紋を縦断しへソまで届いている。こんなものを入れられては腹が裂けてしまうと本気で思う。

「ようやく怯^{おび}えた顔を見せたなミルカ。その表情もそそらせるではないか」
ぐちっ。

ビュトルが太ももを掴み、股間へと肉棒を押し付ける。粘つく音を立てて焼けるような熱さが触れた。ゆっくりと力を入れられ、ミルカの陰唇が膣内に押し込まれる。ギチギチと広がっていく膣口にミルカは顔を青ざめさせた。

「快感にイキ狂え! ミルカ!」

「ひっぐうううううううううっ!」

ずぶうううっ!

陰唇を巻き込みながら巨大な肉が身体の中に押し込まれた。「ぶちい」と何かが裂ける感覚が弾ける。全身の現実感が薄れ、頭の中で火花が散る。そのくせ股間の感覚だけが鮮



明で、身体全部がヴァギナとなつてしまつたようだった。

「あ、ああ……い、痛い、痛い……か、身体が裂けるう……」

「くくつ、あの金色のミルカが痛い痛いわめと喚くとはな。目に涙まで浮かべて」

「——っ!？」

反射的に涙を流していたことに驚いた。こんなこと十年もなかつたことだ。何度も瞬きして涙を押し流す。ぼやけた視界の中では巨大な肉の槍が身体を貫き、赤い血がその茎に伝っていた。

「ミルカの処女、確かにいただいたぞ。お前のマンコの初めての相手はこの俺だ」

「そ、そんなこと何の自慢にも——はぐう！」

反抗の言葉もわずかな身動き一つで止められる。ほんの少しの動作が何万倍もの刺激となつて襲つてくる。もう声も出ない。どくんどくと鼓動が加速度的に高まつていく。肉棒の脈動が膣内で反響し、動かれてもいないのに身体が引き攣つかつてしまう。

「ま、待て！ 動くな！ こ、これ以上奥になど……お、奥ううううっ！」

ずぶぶっ！ ぐぶうううっ！

巨腕に引き寄せられるまま、ミルカの中でペニスが前進する。ミチミチと肉が広げられ、重い圧迫感に息が止まつた。

「はははっ！ 今しがた痛いと言っていたくせに、もう快感に喘いでいるな！ どうだ？
こんな気持ちよさを知っていたか？ これがチンポの快樂だ！」

「あ、はっ、そ、そこおっ！」

ごりっ。硬い亀頭がGスポットに触れた。瞬間、目の前が真っ白になる。完全に意識が飛んでいた。だが次の瞬間には肉棒の感触に気を取り戻させられる。

「どうやらお前の身体は俺のチンポを気に入ったようだぞ。あっさり身体をのけ反らせて感じまくっている。ほれ、ここが弱いのだろうか？ 指でも雌イキしていたからな。それに胸も、こんなに膨らませおつて。乳首がまるで苺のようだぞ」

「やめ、胸を乱暴に！ ひいくっ！」

ぷっくりと膨らんだ乳首を摘ままれた。新たな刺激が走り、膣からの刺激と身体の中でぶつかり合う。

「まるで牛のような大ききさだな。その上、張りも感触も申し分ない最高の乳房だ！ こいつが膨らんできたのは十歳の春だったかな。初潮は十二の時だったな。くくっ、青ざめた顔で屋敷を歩くお前に欲求を抑えるのに苦労したぞ」

「き、貴様、なぜそんなことを！」

「初めから俺の狙いはお前だよミルカ。十年以上前からな」

第三章 公開拘束陵辱

「う、嘘……嘘です！ いやあああああつ！」

エカテリーナの悲鳴が耳をつく。ミルカは唇を噛み、先導するビュトルへと叫んだ。

「ビュトル！ 貴様は正気じゃない！ こんなことが許されると思うのか！ 今すぐやめろ！ やめろおおお！」

喝采が近づく。城門から見える陽の光に目が眩んだ。

万人の声が身体を叩く。『姫からの重大な発表がある』と通告されていた国民たちが城の周りに集まっているのだ。凱旋や演習のたびに感じた人々の期待する声と視線が、今は地獄の釜に思える。

「——え？ な、なんだこれは？」

台車が門をくぐり抜けた瞬間、あれほどあつた喝采が一瞬にして止んだ。

代わりに向けられたのは困惑と動揺の視線だ。

「く、くうううつ！」

悔しさを噛み殺しながら、ミルカはただ押し進められる台車の上で呻く。

そう、ミルカたちは木製の台車に磔にされていなのだ。手足は大の字に広げさせられ、手足首と胴体を台車に固定されている。乳房と股間は露出させられ、日差しの中に恥部を輝かせてしまっている。

その上、二人の首には卑猥な文章が書きなぐられたプレートまで下げられていた。あまりのショックに声も出せない人垣の間を、車輪が石畳を踏む音だけが進み続ける。

「お、おい……あれ姫様か？」

「隣は団長様？ で、でも、服が……なんだよこれ！」

水が溶けていくようにじよじよに広がる混乱。そして誰かが上げた悲鳴を皮切りに城下町は今までにない騒乱に包まれた。

「おい！ 嘘だろ！ 何で二人が捕まっているんだ！」

「誰かわからないのか！ こ、これも何かのセレモニーなのか!？」

「馬鹿！ あれが見えないのか！ 二人のむ、む、胸が！」

青い顔で悲鳴を上げる者。子供を連れて家に戻る者。ただ呆然と成り行きを見守る者。中には鼻の下を伸ばしてつぶさにこちらを見る者もいた。

「み、見るな！ 見ないでくれ！」

思わずミルカは叫んでしまう。その声で視線を外す者もいたが全体からするとほんのわ

ずかで、その他の者たちはまるで吸い寄せられるようにこちらを見つめてくる。

「お、おい！　これはどういうことだ！」

一人の青年が通りへと飛び出し、先頭を歩いてきたビュトルの前に立ちはだかる。

「見てわからんか？　エカテリーナ姫とミルカ騎士団長の露出ショーだ」

「お、お前！　ふざけるな！　すぐに姫様たちを解放しろ！」

同調するように辺りがにわかに騒がしくなる。その姿にミルカはわずかに希望を抱いた。勇気ある者はまだこの国に残っているのだ。

「やれやれ。新たな王相手に頭が高いな」

ビュトルの手が青年の頭に乗せられた。瞬間、ぶちゅつという音と共に青年が消えた。見ればビュトルは道に手をつけており、そこには赤いシミが広がっている。

「愚民風情は地に頭をつけているというのだ。おい、そいつとそいつも殺せ」

猛獣騎士団が剣を抜いて同調した者の首を^は刎ねる。芝でも刈るような気安さだった。

「ひ、ひい！　ひ、人殺——」

叫びを上げた女性も殺された。逃げ出そうとした者も殺された。死体の数が十を超えた時には辺りは水を打ったような静けさとなっていた。

「もはやこの国は俺の支配下にある。姫も騎士も俺の手の中だ。そしてお前たちもここか

ら出ることはできん。この街には結界を張ったからな。出ることも入ることもできない。貴様らに残された道はただ二つ、服従か死かだ。くくっ、文句があるならかかってくるがいい。もつとも、お前たちにその度胸があればの話だがな」

吠え猛るビュトルに誰も何も言えなかった。目の前で人が圧死する場面を見せられ、頼みの綱の騎士団も囚われていては声を上げることなどできないのだろう。

「利口な奴らだ。さあ、よく見ていけ。お前らが信仰する女どもの真の姿をな。顔を背けるのは許さんぞ」

再び台車が動き出す。その速度は実に緩慢でミルカとエカテリーナはその恥じらいの肉体をじつくりと国民に観察されてしまう。

(こ、殺せ！ いっそ殺せ！)

身を焦がすような恥辱が襲う。ビュトルや騎士たち相手なら恥じらいを憎悪に変えることもできただろう。だが今見ているのは愛する国民たちだ。感情のやりどころは失われ、身体を隠すこともできず、ミルカは歯を食いしばって視線を耐える他なかった。

「あ、あれがミルカ様のち、恥部……ごくっ！」

「ああ、団長様……あそこも美しい……」

口々に聞こえる品評の声。その中にはミルカが見知った知人の声もあった。

恥ずかしさに顔が燃えそうだ。

脅されているのだから仕方ない、と割り切るにはミルカは未熟過ぎた。

「さて、この辺りでいいだろう。止める」

台車は大通りの交差点で止められた。普段は市場などが開催される王都でも随一の広さを誇る場所だ。車輪止めを噛ませられ台車はその中心に固定される。

今までの路地とは違い、左右だけでなく前後からも人々に見られてしまう位置だ。遠巻きに見つめる視線が肌に突き刺さる。

「見るがいい！ お前らの愛したエカテリーナ姫とミルカ騎士団長の無様な姿を！ これからこいつらの本性をたっぷりと見せてやる！」

張り上げられた声は通り中に響いた。わずかなざわつきと共に好奇の視線が秘部に集中する。

「国民に見られて興奮したのか？ 濡れてきているぞ。この淫乱どもめ！」

「くひゅっ！」「あんっ！」

ビュトルの指があそこに触れた。右手はミルカの秘部を、左手はエカテリーナを撚っていた。まだ入れられてはいない。しかし首を撫でるようなその動きだけで、ミルカはびくんと腰を浮かせてしまう。隣から響く喘ぎ声からして姫も同様だろう。

（ふ、触れられてもいないのにこんなに熱く……私の身体はどうしてしまっただんだ！）

溶けるような熱さを股間に感じる。既に濡れたそこはまるで煮詰められた貝だ。

「お前らがどれだけ淫乱なのか国民に教えてやる。立派な雌マンコになったと国中に知らしめろ」

探るようにビュトルの指先が秘所をなぞる。そして中指を立てた。

ずじゅっ！

「ひいん！」

かっと思が見開く。膣穴に太い指がねじ込まれ、再びあの快感の波が襲ってくる。

「愚民どもよ、見ているか！これが姫エカテリーナと騎士団長ミルカの真の姿だ！俺のチンポを受け入れ処女を散らされた雌の姿だ！」

ぐちゅっ！　ちゅぐっ！　ちゅぶっちゅぐっ！

ビュトルは手の平を上向きにして指を沈め、腹側を擦りながら抜き差ししてくる。乱暴で豪快で容赦のない強烈な愛撫。ミルカは腰を引いて指先から逃げようとするが、それさえも予想していたようにビュトルの指は的確に性感帯を押さえてきた。

「や、やめろ！　こ、このままじゃ！　また私はっ！」

「あ、ああ！　またあれが来る……来ちゃいますう！」

「う……うう」

ようやく潮噴きが止まった。しかし鈍い快感の余韻は股間に残り続け、また刺激を受けたら爆発してしまいそうだ。

「ひ、姫様があんなお漏らしをするなんて……」

「あのミルカ様まで……こんなことがあるのか」

またあの瞳だ。昨日城で使用人たちが見せた失望と諦観に淀んだ目。それが台車を取り囲んでいる。

（私はまた奴の思い通りに）

手の平の上で踊らされる無力感に吐き気がする。もし自分がヴァルバラくらい強ければ、今頃こんな縄は千切り捨ててビュトルを倒しているというのに。

「いい噴き出しっぷりだったぞ。なるほど。これがお前たちの潮の味か」

べろりと顔にかかった汁を舐め取り、ビュトルは顔を寄せてくる。台車の間に顔を沈め、獣めいた口が次の命令を下す。

「自分たちを犯すよう奴らに言え。色情魔のようにいやらしい言葉を使ってな」

「だ、誰がそんなことを！」

「言わなければここにいる全員を殺す」

猛獸騎士団が剣を抜き、手近な住民たちに向かっていく。その刃に国民たちが大きくざわめいた。

「ま、待ちなさいビュトル！」

ミルカより先にエカテリーナが声を上げた。血の気が引いた顔には統治者としての矜持きょうじが残っている。だがその様子をビュトルは鼻で笑ってみせる。

「エカテリーナ。いつからそんな口が利けるほどお前は偉くなったんだ？ 殺せ。女子供も容赦するな」

「っ、ビュトル……様！ 待つてください！ お願いします！」
血を吐くように言葉を絞り出すエカテリーナ。ビュトルが振り返る。

「言います。言いますから。ミルカもお願い。ここは耐えて」

昨夜の誓いを思い出し、ミルカは静かに頷いた。

「私とセックスしなさい。この事態です。許します」

「わ、私もだ。セ、セックスをしてもいいぞ」

セックス。その言葉を出した瞬間、自分の中の大切なものが砂のように流れていってしまつたように感じた。陵辱ではなく自ら求めるといっただけでこうも違うものか。一線を越えてしまつた屈辱と恥辱に唇が震える。

だがビュトルはやれやれと首を振り、顔を寄せてきた。

「そんなお上品な言葉を使う色情魔がどこにいる？ そうだな、こう言え」

耳に囁かれる言葉にミルカは絶句する。単語の意味は半分程度も理解できないが、それが恥知らずな隠語であることは明白だった。同じようにエカテリーナにも囁きがなされ、端整な横顔が困惑に歪む。

一度だけエカテリーナと横目で見つめ合った。ぐつと涙を堪えるその瞳に勇気を貰う。

「い、淫蕩発情姫エカテリーナの、キツキツロイヤルおマンコに、熱く滾った平民おチ、チンポをぶち込んでください。婚姻前に処女喪失したスケベ雌穴にずぼずぼチンポして平民ザーメンどびゅどびゅして欲しいのお」

「い、淫乱騎士団長ミルカの、柔らかナイトマンコにチ、チンコを生挿入することを許可する。だからだらよだれを垂らす腹ペコヴァギナを蹂躪して、く、臭い精液びゅくびゅくして子宮の奥まで征服してみせろ」

「あ、あの二人があんなことを……」

「ヤベエよ……お、俺もう耐えられねえ」

見ていた男たちの呼吸が乱れ、獲物を狙う獣のように前かがみとなっていく。女たちも顔を赤らめこちらを見ていた。その中には明らかな軽蔑を含んだ視線もある。

「盛り上がってきたようだな。おい、その二人。出てこい。お前らに姫と団長を犯す最初の権利をやるう」

指名された二人の男が人垣から連れ出された。清潔感ある青年たちだ。どんな醜男おとこを相手にさせられるのかと思っていたが、その姿に少しだけほっとする。

「ひ、姫様……申し訳ありません」

「す、すみません団長様。俺……俺……」

気遣う言葉が嬉しい。青年たちは何度も謝罪しながらズボンを下ろす。

（えっ？ こ、こんなものなのか？）

そこから現れたペニスの小ささにミルカは逆に驚いてしまった。太さは筆かと思うほど細く、折れてしまわないか不安になるほどだ。脈動も小さく、ビュトルの猛々しい動きと比べれば生まれたての兎と同じである。

それでも青年たちは必死な顔でペニスを抜き、股間へと身体を寄せてきた。ふーっふーっ欲望を抑え込んだ吐息が肌に触れる。

にゅぐぐうっ！

「んんっ！」

やはり思ったような刺激はなかった。膣を広げる幅も長さもビュトルとは比べ物になら

ない。

「お、おお！ なんだこれ！ な、中に吸い込まれて！ 団長様に飲み込まれる！」

「こ、こっちはすぐ締め付けられる！ ひ、姫様に股間を食いちぎられちまう！」

一方の青年たちは目を剥いていた。最初の遠慮がちな動きはどこへ行ったのか、身体を前傾させて腰を振るっている。

「うっ！ くっ！ ちよ、ちよつと待て！ そ、そんなに乱暴に、するな！」

「そんなこと言われても！ 団長のここ、うねって俺を誘ってくるんです！ ああ、胸も揺られて俺を惑わして！ こんなエロイ身体だったなんて！」

荒い息を吐きながら青年は両手で乳房を握ってきた。ざらりとした手触りが食い込み、蜂に刺されたような痛みが走る。

「すげえ！ すげえよ！ これがミルカ様の生乳か！ こんなに柔らかいもの握ったの初めてだ！ すうすう！ ああいい匂いだよお！」

胸を揉みながら顔を谷間に埋めてくる男。荒れた肌と湿った鼻息が薄肌にかかり、背筋を毛虫が這ったような嫌悪感が走った。

（ちよ、調子に乗って！ くっ、痛いだけで全然よくない。この下手くそ！）

青年の胸揉みは激しくはあっても愛撫ではなかった。自分が触りたいように触るだけの

動き。まるで道具にされた気分だ。しかも、こちらが感じ始めた時に位置をずらすという愚鈍つぷりに、ミルカは苛立ちを募らせていく。

（街の男はこんなものなのか？ ビュトルの時はもつと、私が私でなくなるくらい……）
そこではつと気づきミルカはかぶりを振る。無意識のうちにビュトルのことを考えてしまった。あの巨大な凶器のことを思ってしまった。これではまるでビュトルに惹かれていくようではないか。

「ふっ！ くっ！ んんっ！」

「おっ、ミルカ団長も気持ちいいんだな？ そんなあんあん喘いで！」
勝手に言っていると思う。これはただの演技だ。ビュトルが特別ではないということを立て証するための方便だ。奴を否定するためなら喘ぎなどいくらでも上げてみせる。

「ああ、ミルカ団長！ 受け止めて！ 俺の子種を中に受け止めてくれ！」
気をよくした青年はさらに身体を倒し、ほとんど密着するような形で腰を振るようになった。口からよだれを垂らして快感を貪るその様子は、人ではなくケダモノとしてミルカの目に映る。

「くっ！ んう！ あ、ああっ！」

意識して喘ぎをくり返す。一声上げるたびに身体に官能が溜まっていくのを感じる。

(ああ、エティもあんなに気持ちよさそうに)

自分以外の声に横を見ると快感に喘ぐ姫の姿があつた。車輪を軋ませながら男に覆いかぶさられる姫の姿。その腰がぬらぬらと陽の光に輝いているのがどこまでも淫猥だった。

(わ、私もあんな風になっているのか？ いや、これはただの演技だ！)
ずじゅつ！

「あ、ああんっ！」

Gスポットをえぐられ、思わず口から本気の喘ぎ声が出てしまう。いつからか股間の熱さが止まらない。演技であつたはずの喘ぎは自分のコントロールを離れ、彼のペニスの方に支配権を委ねていた。

小さいと馬鹿にしていた肉棒がこんなにも身体を狂わせている。

(こ、これでは本当に淫乱だ！ わ、私はそんな女ではない……はずなのに！)

奥菌を噛みミルカは快感を抑え込む。腰を浮かし弱点をかばう。だが一度火の点いた身体は止まらない。

「で、出るっ！ 出す！ ミルカ団長の中に全部！」

「お、俺もだ！ 姫様に射精なんてもう二度とできねえ！」

「あ、あ、あつ！ こ、こんなところでい、いくうううっ！」

「や、あつ！ み、皆が見ているのに、くうううつ！」

びゅぐつ！ びゅるつ！ ぴゅつ！

腔内に広がる熱さに股が締まる。身体が勝手に反応し、精液を飲み込んでいるのだ。

（あ、ああいつてしまった……こんな、はずではなかったのに……）

オーガズムの余韻が下半身から上ってくる。絶頂自体は浅いが見ず知らずの男たち相手にこんな場所でアクメしてしまったことは、単純な絶頂以上の背徳感を与えてくる。

「へ、へへっ！ 最高でしたよ団長様！」

快感と後ろめたさが同居した曖昧な笑みを浮かべ、青年は身体を離れた。どろりと流れ出る青臭い液が恨めしい。

「間を空けるな。少しでも休む様子を見せたらその都度に国民を殺すぞ」

ビュトルの言葉に意識が戻る。見れば剣を突き付けられた男たちが列を成していた。その数はざっと五十人はいる。しかも同じ人数がエカテリーナの方にも並んでいた。

「ま、待て！ まさかこの全部を!？」

「そ、そんなむ、無理です……」

「嫌なら拒否しても構わんぞ。もつともお前らに射精しなかった者は斬り捨てるがな」

太めの中年二人が前に出る。身体を重ねられるとその腹肉がぐにゅと下腹部を押しきて

た。股間からイチモツを取り出し、精汁溢れる股間へと押し付けてくる。

ずんっ！

「ふぐ！」

容赦ない挿入に思わず声上がる。遠慮も節度もない飢えた中年の挿入だ。

「おお、あつたけえ！　これが夢にまで見たミルカ様のお宝！」

「姫様！　愛してます！　ずっとこうしたかったんですよ！」

最初の青年たちに当てられたのか、彼らは鼻息荒く腰を前後させてきた。一度中出しされて緩んだ膣はあつさりそれを飲み込んでしまう。そこに加えられる欲望ピストンに、再び官能が高まっていつてしまう。

「ミルカ様、感じてますねえ！　俺ので感じてくれてるんだねえ！」

一人で納得し、肥えた男はべったりと身体を押し付けてくる。まるで母親に甘える子供だ。汗に塗れた顔で頬ずりされ、嫌悪感に産毛が総毛立つ。

気持ち悪い。

守るべき民に向けてこんな感情を持つてはいけないのに、ミルカの身体はそれ以外の感想を抱けなかった。

「おら、孕めミルカ！」

遂に呼び捨てだ。重たい身体が覆いかぶさってくる。中年ペニスが身震いした。中で先端が膨らみ、執拗に子宮を狙うのがわかる。

びゅっ！　びゅるっ！　びゅびゅっ！

「うっく！　ふううう……っ！」

何とか絶頂は我慢した。逆流する精液は哀れになるほど少ない。

「次は俺だな。このデカマラでひいひい言わせてやるよ」

褐色に日焼けした遊び人たちが前へ出る。なるほど言うだけあつて確かに彼のペニスはそれなりの大ききだった。周囲からも感嘆と嫉妬の視線を集めている。

（こ、こんなものが自慢になるか馬鹿者め！　奴のモノに比べれば棒切れだ！）

自分の処女を奪った怪物ペニスを思い出し、ミルカは蔑みの視線で彼のモノを睨む。

（そうだ。私は一度あんな太いモノを受け止めているんだ。このくらい耐えてみせる！）

余裕の笑みで身体を寄せてくる男を睨みつけながら、ミルカはぎゅっつと拳を握った。

ぐぶうっ！

「うおっ、にゆるって唾えやがった！　そんなにチンポ食いたかったか！」

それでも広げられる膣口をわずかな痛みと大きな快感が襲う。クリトリスを同時に弄るといこしやくう小癢こしやくな技も混ぜ込み、アクメを耐えたヴァギナをいじめてくる。

「気持ちいいだろ？ 可愛い声上げろよ」

根元から絞り出すように乳房を握られ、思わず「んっ！」と喘ぎが出てしまう。ニヤリと笑う軽薄顔。そのまま種馬よろしく欲情のピストンが開始される。

ずぶっ！　じゅくっ！　ぱんぱんっ！

汗気を増した秘部が濡れ草を踏むような音を上げ始める。これが自分の分泌液であると思うと余計に心音が加速してしまう。

こんな姿を姫に見られたくない。ミルカはエカテリーナから顔を背け、人垣へと視線をやった。

（っ！　なんだこの目は！）

そこにあつた視線にミルカの身体が全力の警鐘を鳴らす。台車の傍に立つその全員が血走った目をギラギラと見開き、勃起した股間を押さえ前かがみになっている。まるで餌を投げ入れられた飢えた獣だ。

「一人一人では埒があかな。全身を使え。好きな場所にぶち撒けるがいい」

ビュトルの言葉に生殖器が一斉に脈動した。男たちが顔を見合わせる。躊躇しているとより、他の雄に先を越されないように牽制し合っているようだ。

「も、もう我慢できねえ！　ぶっかけてやる！」

「手で握ってくれ！ できんだろ！」

「ああ、この髪だ！ この金髪を染め上げる！」

最初の数人が口火を切り、その背を追い越さんとするように何十人という男がよだれを垂らして駆けてくる。

「ミ、ミルカ団長！ 握ってくれえ！」

拘束された右手に熱い肉棒を握らされた。どくどくという脈動が、指先を振動させる。内側から弾けんばかりの熱も伝わり、皮膚が火傷してしまいそうだ。そのまま両手をセンズリ穴にして、男の溜まった欲望をぶち撒けんと腰を振られる。

（わ、私の手からアレが出入りしている！ 汚らしい先端が飛び出て！）

見慣れた握りこぶし。そこに剥けた先端が出入りするのは体内を犯されるのはまた違う恥ずかしさがあった。にゆくにゆくと音を立てながら、茶色の皮から先端が飛び出してくる。

「うおお！ 気持ちいい！ 顔にかけてやる！ 金の髪もどろどろに！」

「ひくっ！ 熱っ、臭い！」

頬に熱い粘液がかかり、生臭いニオイが顔に広がり、ミルカは反射的に顔を背けた。

だが向いた左側にも別の男が迫り、張り詰めた股間を手に押し付けていた。

「へへ、左手いただき！ おお、汗で吸い付いてくる！」

「両手でチンポ握る团长様エロ過ぎだろ！ 絶対に俺のザーメンで染めてやる！」
にゅくちゅく！ ちゅちゅ！

右左のチンポがそれぞれ動き、耳に先走りの泡立つ音を染み込ませてくる。

耳も塞げず、逃げ場もない。さらに下でも興奮した男の抽送が激しさを増していた。

「む、無理です！ こ、こんなに沢山なんてえ！」

悲痛な声に意識が戻った。

「エカテリーナ姫！ 返事をしてください！」

「ミ、ミルカ！ た、助け！」

見ればエカテリーナの周りにも男が群がり、生々しい分泌液の音が響いていた。男の壁の隙間から覗くその顔は苦痛に歪み、その口は人民の慈悲を訴えている。

「へへっ、おててがスベスベだ。これが姫の御手の感触か」

「うおお！ マンコが絞ってくる！ こんなの出ちまうに決まってるじゃないか！」

男たちの興奮はともすればミルカへのそれを上回っている。かつては敬愛に満ちていた者たちの豹変ぶりにエカテリーナは怯えたようにしゃくり上げるばかりだ。

「ま、待て！ 姫に手を出すな！ わ、私が相手になる！ だから姫には！」

「お、言うねえ団長様。なら相手して貰うぜ！ この髪でな！」

「な——っ!？」

あぶれていた男がミルカの金髪を手に取り股間に巻き付けた。そのまま髪ごと肉棒を握り締め、激しい手淫しゅいんを開始する。

「うおおおっ！ 柔らけえ！ サラサラしててそれでいてしっとり濡れてやがる！」

「お、俺にもやらせろ！ この金髪を一度味わいたかったんだ！」

「こうされるために髪を伸ばしてたんだな！ お望み通り、扱き穴にしてやるぜ！」

次々と男たちが髪を手に取り、股間に巻き付ける。その人数は五人以上だ。

(ひ、姫様に褒めて貰った髪を！ い、異常だ！ こんなのおかしい！)

金色と呼ばれ民に称賛されていた金髪が男の欲望に塗れていく。

にちゅにちゅと髪の間で精液が泡立つのがわかる。つんつんと頭部を引っ張る刺激が否応なく犯されている現実を教えてくる。

「う、うわあああああつ！ やめろ！ 髪はやめろおおおっ！」

「ははっ！ 遂に泣きが入ったぜ！ ミルカの泣き顔なんて初めて見た！」

抑えていた感情が爆発し、涙となって零れてしまう。それさえも男どもに嘲笑され、ミルカの恥辱を加速させていく。

「よっしゃ出す！ ミルカの全身をザーメン塗れだ！」

「ミルカ組に負けるなよ！ 姫様の身体も精液漬けにしてやる！」

「あ、あ、ああ！ イっちゃう！ こんな耐えられるかあ！」

「ふあああ！ だ、ダメですう！ こんな場所でいくううう！」

まるで競い合うように男たちの速度が増していく。股間、両手、髪のが激しい刺激を送り込み、身体の中に蓄積していく。最初は平然と受け止められていた股間のイチモツもいつの間にか蕩けた肉マンを駆り立てる脅威となっていた。きゅんきゅんと膣が収縮し、欲望の発散を求めてしまう。

さらにあぶれた男たちも肉棒を握り締めてこちらに先端を向けている。前も後ろも右も左もチンポの列が並び、むせ返るような欲望の熱をミルカに浴びせていた。

「お、おおっ！ いくいくいく！ チンポに囲まれて、ザーメン発射されるう！ ああ、髪も手も染められるう！ こんなチンポだらけの中でイッてしまいうううっ！」

「ああ、許して！ もう許してえ！ おチンポいっぱいなんですう！ おチンポしか見えないのお！ うぐう！ な、中に出しちゃだめええええっ！」

もはや声を堪えることすらできない。隣から聞こえるエカテリーナの声も今のミルカには興奮を加速させるスパイスでしかなかった。男たちが前傾姿勢となる。その先端がぶく



わらないようで、美しい黒髪にもザーメンがこびりついている。

「おい！ 早く替われ！ 後がつつかえてるんだ！」

だというのに、男たちは入れ替わり立ち替わり、この身体を犯そうとしてくる。

「——っ！ ビュトル！ 貴様が彼らを惑わしたのだな！」

思わずミルカは叫んだ。そうとしか考えられなかった。

きょうえん
饗宴に参加せず、ただ成り行きを見ていた悪魔はミルカの言葉にニヤリと笑む。

「惑わす？ 何のことだ？ 俺がしたのは奴らの中にある抑制心を緩めてやっただけよ。

今のこいつらの行動は全て、こいつら自身が望んでいたことだ」

「で、でまかせを！」

肩を竦めてビュトルが台車へと歩み寄る。それだけでミルカたちに群がっていた男が波のように引いていく。

「これを見てもそう言えるかな？」

一枚の紙が投げて寄越される。そこには明らかにミルカをモデルにした女騎士が男に組み伏せられる様子が描かれていた。

「他にもあるぞ。民衆の妄想力と欲望も大したものだ」

次々とミルカの前にちらつかされる絵画の数々。その全てがミルカを模した女性が男と

交わるものだった。

「男騎士に屈するもの。戦場で敗れて陵辱されるもの。商人に奴隷として売られるもの。オークに輪姦されるもの。触手の魔物に襲われるもの。ほう、この魔術によって操られる題材はまさしく今の状況そのものだな」

「そ、そんな……こんなものが出回っているというのか……」

「エカテリーナも見ろがいい。お前が清いと思っていた国民どもの本性だ」

「ひっ!? いやあああ!」

自分が男に犯される絵画を突き付けられ、エカテリーナは一層高い悲鳴を上げた。強い信頼を寄せていたからこそ、その悲鳴は実際に犯されていた時以上の悲痛さだった。

「国民は清く美しいでも思っていたか? お花畑の発想だな。どいつもこいつもお前らを犯したくて堪らなかつたんだよ。バルコニーで謁見する姫の姿で自慰をし、街道を行く騎士の姿に発情していたのだ」

ミルカもエカテリーナも何も声を上げられなかった。

ビュトルたちだけが例外だと思ひ込んでいた。

国民は王を敬い、王は国民のために身を粉にする。そんな美しい関係を築けていると思っていた。だが実際には違うのだと思ひ知らされた。彼らもビュトルと変わらない。羊の

皮の下に醜悪な欲望を隠し持つ獣だったのだ。

(わ、私は何のために……こんな、こんなことなら)

——民など見捨ててしまえばよかったのに。

(っ!!) ち、違う! 私は騎士だ! 王を守り、国を守り、民を守る者だ!

脳裏に渦巻いた言葉をミルカは慌てて否定する。だがそれが民のためではなく、自分の信念を保持するためであることをミルカ自身気づいていない。

「これは……でも、仕方がないこと……生理現象は止められないから……」

一方のエカテリーナはぶつぶつと呟きながら鬼気迫る表情となっていた。王宮で生まれ育った彼女にとって市民の生の欲望は直視に堪えないものだったのだ。

「くくっ、愉快的顔だぞミルカ、エカテリーナ。そら、民との交流を深めるお前らに俺からもプレゼントを送ってやろう!」

ビュトルが手をかざしたかと思うと、青白い光が輝き二人の身体を照らした。

「な、何を……ふぐっ!」

ずぐんっ!

強烈な快感が肌を貫く。淫紋で強制アクメさせられた時と似ているが、それとはまた違う薄い膜が全身に張ったような官能だ。

第四章 堕ちた剣

「こんなに時間をかけてしまうとは。塵芥じんがい風情がこの私の手を煩わづわせるなど恥ちを知れ」
剣に付いた鮮血を振り払い、女は倒れ伏した鎧姿を一瞥いちべつした。死体は合計五体。この近辺にいた敵は全て始末したことになる。

「城中は今どうなっている？ 何にせよ急がねば。くつ、こんなことならもっと早くに動いたものを」

背中の鞘に大剣を納め、長い赤髪を風になびかせる。
閉ざされた城門を見つめ、女は悠然と歩み出した。



あの陵辱の後、ミルカの中で何かが変わった。

具体的に言えば男に対する見方だ。

女を無理矢理犯したいなどという欲求は人格破綻した犯罪者だけが持つものだ。多くの

男性は清い付き合いをして同意を得た上で枕事に及ぶ。婚姻前のセックスなどもつてのほか、無理矢理襲うなんて人殺し以上の罪悪だ。そんな風に考えていた。

だが、それは幻想だと思い知らされた。自分とエカテリーナを犯し抜いた生々しい肉棒の感触はあまりに現実的で、もはや男というものを自分と同じ生き物だと思えなくなっていた。

慈愛を注いでいた国民が、ビュトルと並んだ瞬間だ。どちらも己の欲望のために行動するのだというのなら何も変わらない。

（――なら、気持ちよくしてくれるビュトルの方が）

そんな考えを必死に押し込めて、ミルカはエカテリーナと共に牢屋の中で一晚を過ごした。彼女とはほとんど話をしなかった。きっと彼女も複雑な想いを胸に抱いているのだと思う。

そして今、ミルカはエカテリーナと共に再び謁見の間へと連れてこられていた。

「来たな。ミルカ、エカテリーナ。くくつ、よく似合っているではないか」

当然のように玉座に腰かけているビュトル。本来は一喝すべきなのに、その顔をまともに見ることができない。

「どうした？ 顔を赤くして、その服がそんなに恥ずかしいのか？」

「き、貴様はどこまで私たちを辱しめればっ！」

思わず叫ぶと、胸元がふるんと震える。同時に「ちゃりん」という金属の音が鳴り響き、ミルカは慌てて胸元を隠した。

ビュトルから着せられた新たな衣装。それはもはや服ではなかった。形容するなら女体専用に作られたプレゼントリボンだろうか。

乳房どころか乳首すら隠さない紐状の胸元、V字に切り込み恥丘を覗かせる股間部。臀部はむっちりとした尻肉が完全に露出し、足りない布地がお尻の割れ目まで見せてしまっている。首にはビュトルから渡された首輪がしっかりと嵌められていた。

その上、乳首とヘソには光沢を放つピアスが付けられた。

部屋の照明に輝くそれは一層視線を集め、二人が身震いするたびに可愛らしい金属音を奏でていた。

「ひひっ、お尻が丸見えだぜ！ 尻の穴も見えそうだ！」

「横から見えるおっぱいがたまんねえな！」

「乳首にピアスだぜ！ 商売女だってあんな変態アクセサリーしてねえよ！」

「……っ、み、見ないでください！ 見ないでえ……！」

取り巻きの歓声に小さな身体をさらに縮こまらせて隠れるエカテリーナ。そんな彼女の

身体を抱き寄せ、ミルカは恥部を何とか隠そうと試みる。

「はははっ、変態女が身を寄せ合っておるわ。さて、今日はどちらから味わうかな」

「ひ、ひい!？」

ぶるんっ!

立ち上がったビュトルが股間を露出させる。既にイチモツは起立し、槍のような鋭さでそそり立っている。それを見たエカテリーナは顔を歪め、ミルカへと抱きついてきた。

「もう酷いことしないで……お願いです……それはもう嫌なんです……あんなことはもうしないで……許して……許してください……」

エカテリーナは小鹿のように身体を震わせ、ビュトルの慈悲を懇願する。

「どうせ国民に何十発も出されたのだ。今更変わるまい？」

気丈であった顔が恐怖に歪み、童女のようにいやいやと首を振る。

「ま、待てビュトル! わ、わ、私が相手をする。だから姫様に手を出すな!」

言い放つと不思議な高揚感が身体を包んだ。ビュトルは値踏みするような視線を這わすと、小馬鹿にしたような鼻息を漏らした。

「いいだろう。だが、俺を満足させられないようなら姫をボロ雑巾のように犯してやる」
ビュトルの腕が腰へと回される。強い力で身体が抱き寄せられ、首輪がチャリツと音を

立てる。

「ごめんなさいミルカ……ごめんなさい……」

エカテリーナは部屋外へと連れ出される。その最後まで彼女はミルカへの謝罪をくり返していた。

「必ず助けます姫様！」

扉に消える背中にミルカは叫んだ。

（ま、またされてしまうのだな……あ、あの凶悪なモノで……）

歩くたびに鼓動が激しくなるのを感じる。左右に振れるカリ太を見ていると胸の布地が突っ張るのがわかる。見れば薄生地から二つの突起が浮かび上がり、揺れるたびに擦れてしまっていた。

「ふむ。いい感触だ。お前の尻を直に感じられるな」

再び玉座に腰を下ろしたビュトルの膝上にミルカは乗せられた。

硬く太い足の感触。むっと鼻に香る汗の臭い。そういったものをミルカは以前より細かに嗅ぎ取れるようになっていた。

その上、ビンっとそそり立つ逞しさを腹に押し付けられ、ミルカはもじもじと身体を揺すってしまふ。

「淫紋も色濃くなっているな。最初はあれだけ薄かった模様がこれほどはつきりと
そう言い、ビュトルは愛おしそうにミルカの腹に指を這わせた。

刻まれた淫紋は以前よりもはつきりと刻み込まれ、まるで最初から身体の一部であつた
かのようにそこにある。

「お前も嬉しいだろう？ もうすぐ身も心も悪魔と化し、俺の物になれるのだからな」

「ふ、ふざけたことを！ こ、こんなものに私は絶対に屈したりしない！」

「相変わらずのへらへらず口だな。まずはその口から黙らせるか。そら、奥まで俺に見せてみ
ろ。もし逆らえば……」

「い、言われずともわかつている！ なんだ口程度……あ、あーん」

秘所ほどの恥辱はないと思っていたが、他人の顔の目の前で口を開けるといふのは想像
以上の気恥ずかしさだった。興味深そうにビュトルが喉奥を覗いてきて、背筋がくすぐら
れているように反応してしまう。

（べ、別に変な部分はない……はずだ。口が臭ったりしないだろうか）

乾いていく舌がひくつき呼吸が荒くなる。まるでそれを待っていたかのようにビュトル
は人差し指と中指を束ねて舌先に差し出した。

舐めろ、ということだろう。

「……んくつ、あ、れろ……ちゅつ、ちゅぷつ」

太い指先が舌の上で躍る。乾いた木のような硬さと舌触りだった。

（不思議な味だ……少ししよっぱいような……んっ、爪の間が一番濃い……あ、指の間も……なんだがぞくぞくしてきた……）

ちゅつ、ちゅぷつ、くちゅつ。

知らず知らずのうちに口内は唾液で満ち、口端から雫が流れ落ち始めていた。

「くくつ、乳飲み子のように吸い付いているな。どうだ？ 俺の指は美味いか？」

「こ、こんなにも……ちゅつ……不味いに……決まっている」

「その割には美味そうによだれを垂らしているがな。まあよいか」

「んあ！」

ちゅぷつ！

指を抜き取られる。そのまま口端に親指をかけられ、ぐいと広げられた。

「唾液で口の中がドロドロだな。その中で真っ赤な舌が泳いでいるぞ。俺が欲しいのだから？ そうでなければこれほど期待して汁を漏らすことなどないからな」

「っ！ す、擦り付けるな……んんっ！」

ぐりぐりと腹に硬いイチモツが押し付けられる。まるで子宮を征服した時のことを思い

出させようとしているようだった。

「どうだ？ 久々のご主人様のチンポだぞ。恋しくてしかたがなかっただろう？」

「だ、誰が！ そ、そんな、ただデカイだけの肉の塊なんて欲しくなどない！」

「やれやれ、素直にならん奴だな。どれ、お前の身体に聞いてみるか」

「——っ!？」

ぱちんっ！

指を鳴らされミルカはその場に硬直する。淫紋の輝きが身体の自由を完全に奪い去ったのだ。

「以前は肉体操作までしかできなかつたが、今はどうか？ ミルカよ、俺のチンポは国民どもと比べてどうだ？ お前の本心を包み隠さず言ってみろ」

その言葉が身体の中に染み込んでくる。

無意識のうちに鼻が息を吸い、口が勝手に動く。ミルカの拒絶の心とは裏腹に唇はどこまでも雄弁に感想を述べてしまう。

「このチンポはとても太く、逞しく、頑丈で、並び立つ物はないと思っている。ニオイも強く、嗅いでいるだけで股間が濡れてしまう。それに比べると国民のチンポはどれも貧相で私を本当には満足させてくれなかった。処女を奪われた瞬間と比べてしまい、犯されれ

ば犯されるほどに恋しくなっていた。またあんな風にされたいと今も思っている」
操られた自分はどこまでも事務的な口調であった。だがそれが逆に真実を語っているとビュトルに教えてしまう。

「はははっ！ どうやらお前の身体はよっぽど俺のチンポを気に入ったらしいな！」

「——あ、ち、違う！ こんなものは嘘だ！ お前に操られているせいだ！」

否定するがミルカも心の中でわかっていた。

ビュトルのチンポ以上の性器はない。街中の男との交配を経験したからこそ、ビュトルの『それ』が特別であると実感できてしまっている。

このチンポ以上の物などこの世に存在しない。そう断言してしまいそうになるほどに。

「目が俺のモノに釘付けだぞ。この淫乱め。見ていないで奉仕をして貰わんとな」

「ほ、奉仕……手で擦れというのか？ それとも髪を使えというのか？」

国民たちが求めてきた行為を思い返しミルカは唇を噛む。

だがビュトルは一笑し、ミルカの胸を軽く手で持ち上げる。

「手や髪もよいが、せっかく服を着せてやったのだ。この乳袋を堪能させて貰おうか」

「痛っ!!」

胸に付けられたピアスを指で引っ張られ、思わずミルカは声を上げてしまった。じんじ

んと鈍い痛みが胸先に広がり、赤い突起が硬さを増していつてしまう。

「挟め。その大きさなら俺の物も包めるだろう？」

「な、なんだと!？」

言葉の意味がわからなかった。発想が狂っている。女の象徴たる胸で男性器を挟むなど人間の発想とは思えない。

「ば、馬鹿を言うな！ これは生まれてくる子のためにあるんだ！」

「くくっ、初々しい反応をしておって。言っておくがこの程度は大したことではないぞ？ 街の娼婦ならば基本作法の一つだ」

「わ、私は娼婦などではない！」

「そうだったな。俺の所有物、可愛い雌奴隷だ」

反論の口火を切ろうとミルカは顔を赤くするが、ビュトルの視線が扉に向かうのを見て言葉を呑んだ。

「こ、この変態め！ やればいいのだろう！ やれば！」

ヤケクソ気味に叫ぶミルカ。それを満足げに受け止め、ビュトルはミルカを膝上から下ろすと堂々と足を広げた。

(改めて見るとなんて凶悪な造形なんだ)

幾多の王が座ってきた玉座の座板に、巨大な鞆丸が乗せられている。自分の手の平でさえ包み切れないような大きさだ。それが二つも並ぶ様は何かの冗談としか思えない。

その上にそそり立つ肉の塔。それにミルカは釘付けになってしまふ。

（私の腕と同じくらい太くて、ミミズのような血管が走っている。鍛え抜かれた戦士のようによい……これを胸に挟むのか……いい、一体どうなってしまうんだ）

まったく未知の状況に心臓が痛いほど高鳴る。

ミルカは自身の胸を両手で持ち上げ、ビュトルの股間に身体を寄せた。膝立ちになり、彼のイチモツの真上へと乳房を持ち上げる。

「んっ！ 熱う……それにヒクヒク動いて……」

くにゅっ！ ぐちっ！

胸の下に触れた先端は炎のように熱かった。先走りは湯水のように溢れ出ており、ミルカが緊張に身体を震わせるたびに湿り気ある音を響かせる。

そして太い。こんな太いものを胸の間に入れることなど初めてだ。

深く息を吸う。その動作でも精液臭を嗅いでしまい、身体の中が熱くなってしまう。

にゅぶぶぶ……っ。

「おお、乳袋の圧力がいい感じだぞ。柔らかくてまるで温かい毛布に包まれているようだ。

くふう、やはり乳はいい！俺のチンポもお前の谷間に喜んでる！」

「う、動くな馬鹿！」

我慢できないとばかりに腰を揺らすビュトルに、ペニスも胸の中で暴れ出す。

慌ててミルカは胸を左右でぎゅつと潰し、零れ落ちないように抱きしめた。

「くっ、こんな太いのが中に入って……うう、またニオイが強くなってくる」

胸を中から左右に押し広げられる初めての感覚。なまじ生殖行為ではないだけに、冷静にその感触を観察してしまう。

じわじわと強くなるビュトルのニオイ。

ミルカが腰を下ろすと「ぬぷっ」と音を立て先端が顔を出す。

「くっ、臭い……っ、なんてニオイをさせているんだ！ちゃんと洗っているのか！」

胸で包んでいるというのにビュトルのそれは鼻先まで届いてしまう。そしてそこから漂う精液臭は鼻奥をつーんと刺激し、それ以外の感覚を鈍らせてくる。

見れば表面には黄ばんだ恥垢が浮かんでおり、先走り汁と混じり合って凄まじい臭気となっていた。

「ふむ。そういえば、あまり洗っていないなかったか。この身体になつてから垢もよく溜まるようになったしな。ちょうどいい。ミルカ、お前に洗わせるとしよう」

「——な」

「口でしゃぶれ。先ほどの指と同じだ。俺の物を舌で舐め上げ、恥垢を飲み干すのだ」
今度こそミルカは絶句した。

「ふざけるな！ できない！ できるわけない！ こんな汚い物をく、口に含むなど！」

「はははっ！ 精液は上等でチンポは汚いとでも言うのか？ お前の口はもう汚らしい愚民どもの汚液で犯されているだろうに！ まさか淫紋に命じられたいのか？ あるいは姫を代わりに差し出すと言ってみるか？」

「ぐっ！ ぐうううっ！」

「観念して舐めろ。なに、やってみれば案外クセになるかもしれないぞ？」

齒噛みするミルカに、ビュトルは嘲弄の口調で股間を上下させる。

ぎゅつと瞳を閉じ、ミルカは口を上げる。口内は先ほどの唾液がまだ残っており、熱い雫が舌尖から垂れる。

「はあはあ……ごくっ………ちゅう」

おずおずと谷間を寄せて、肉棒へと口を付けた。唇がぶにつとした感触に触れる。硬い硬いと思っていたのに、意外と愛らしい柔らかさに驚く。

「~~~~っ！」

ビリビリとした官能が恥骨まで走る。口の中に入ったわずかなカウパー液が全身に快感を広げたのだ。それは二オイによるものと比べ物にならないほどの刺激だった。

「あ、あふつ、な、なんだこの味は……くちゅつ……臭くて苦くてしょっぱくて……ちゅつ……なのに、舌が止まらない……ちゅぷつ！」

小水や精液を吐き出す穢れた穴。そう頭ではわかっているのに口が止められない。

はあはあと荒い息を吐きながら舌先で亀頭を何度も舐める。そのたびにチンカスが剥がれ取れ、口の中へと飛び込んでくる。

「もつと舌を使え。下手くそめ。俺がどこで感じているかを観察せんか」

「ふぶつ、そ、そんなことを言われても」

下目遣いに見下ろしてくるビュトルにミルカは眉を寄せた。

なにせチンポをしゃぶるなど初めての経験なのだ。舌で舐めるだけでも精一杯、これ以上どうすれば喜んで貰えるかなどわかるはずがない。

「やれやれ。剣術なんぞ無駄なことに頭を使っているからそうなるのだ。雌奴隷ならばチンポの扱い方を覚えろ。まずは口に含んで啜り上げるんだ」

頭を掴まれぐいと肉棒に押し付けられる。突然のことに油断して、ミルカは巨大な先端を口の中に入れることを許してしまった。

「ふぶっ!? んっ! んぐううっ!」

「ほお、嫌がる舌がよい刺激となっているではないか。そのまましゃぶれ。口から抜くのは許さんぞ」

口いっぱい広がる苦い味。ギチギチに広げられて口端が痛い。

それでも姫が人質に取られている以上、逆らうことはできない。臭みを必死に飲み込みながらミルカは首を前後させて亀頭を飲み込んでいく。

「くくっ、あのミルカが大口を開けて必死にチンポを咥えておるわ。ほれ、胸も動かせ。パイズリだ。そのデカパイは何のためにあるんだ?」

「ば、ばいじゅり? どうしゅれば」

ももごととチンポを咥えたまま問いかける。それも心地よいのかビュトルは上機嫌に身体を起こすとその両手で乳首を握ってきた。

「ふぐっ!」

ちゃりんと音を鳴らし、ピアスが摘ままれる。それをぐいと中央に寄せて、ビュトルは激しく動かし始める。痛みに身がよじれる。だが同時に荒々しい快感が胸から広がっていた。

「こうだ。チンポを胸に挟んだまま動かして抜き上げる。胸をマンコにしたつもりでな」

最後の言葉にかあつと顔が熱くなる。

(こいつにしてみればアソコも胸も変わらないというのか。畜生め)

心の中で悪態をつきながらミルカはぎゅつと胸を寄せた。中心にある鉄のような硬さを意識しながら身体を上下させ始める。

日々の訓練で足腰を鍛えていたミルカからすればこの程度の動きは準備運動に等しい。たふたふつとリズムカルに腰を動かせば、ビュトルが心地よさそうに身体を震わす。

(こうして根元の方をぎゅつとして上まで動かせばいいんだな。一番太いところは特に重点的に……くっ、ピクピク震えて……偉そうなこと言つて、お前だつて感じているくせに！)

媚びるつもりは微塵みじんもないが、それでも機嫌を損ねるわけにはいかない。

言われた通り反応を見ながら、ミルカはビュトルの反応のよい場所を探っていく。カリ首への刺激がビュトルは好みらしい。乳房でぎゅつと締め付けるたび、ヒクヒクと先端の口が広がり、中から透明な先走りを垂らすのがわかる。

「俺の顔を見つめるのも忘れるな。もちろん口もパイズリもサボるなよ。全身を使って俺のチンポに奉仕しろ」

「くう。ちゅっ、ちゅぶつ、はあつ、ああ、先走りもこんなに垂れて……胸の中に……」

次々と下される命令。それをミルカは黙ってこなしていく。

膝立ちとなり、腰のバネを活かして肉棒を抜き上げる。同時に先端を啜り上げて体液を口に飲み込んでいく。

唇からは溢れた唾液とカウパーが陰茎に伝い、さらに谷間へと落ちていった。それを潤滑油としながらミルカは全力のパイズリでビュトルをもてなす。

(熱い……お汁が零れて胸の中に……くっ、あれの体温が伝わってくる……)

体液で密着した乳房の肌に男性器の熱さが伝わってくる。

にちゆにちゆと音を立てながら身体中を使って肉棒を擦り上げるといふのは、本当に倒錯的な感覚だった。ビュトルは胸をマンコにしろと言ったが、これでは身体全部が性器にされているようだ。

「よし。そのまま突き込んでやろう。胸に顔を埋めてしっかりと飲み込め」

「こ、これ以上奥になど……入るわけ！」

「まったく泣き言ばかり言いおって。本当に世話が焼ける。命令だミルカ。『俺のチンポを喉奥まで飲み込め』。窒息してもやめるなよ」

「——っ！ やめっ、んっ！ んんんんっ！」

ビュトルの言葉に淫紋が輝いた。またあの感覚だ。身体の主導権を奪われ、無理矢理に

奉仕させられる。

「んっ！ ちゅぶっ！ や、やめ！ んぶちゅっ！ じゅるるるるっ！」

勝手に身体が動き出し、ぐいぐいと肉棒を口の中に飲み込んでいく。

無理だと心の中で叫ぶも操られた身体は止まらない。胸を持ち上げていた両手は男性器を握り、奥まで飲み込めるよう位置を調節する。

（く、苦しい！ し、死ぬう！ い、いやだ！ チンポを喉に詰まらせて死ぬなんて！）

ごりゅ、と音を立てて肉棒が喉奥を越えた。入っている。完全に首まで先端が潜り込んでいる。ぎつちりと口が埋められ息ができない。股間に近づき過ぎて顔にビュトルの陰毛が触れている。鼻先に潜り込む剛毛にミルカは目を見開いた。

「お、お、おぶううううっ！ おっ！ ぶぶっ！ ちゅっぢゅる！」

そのままミルカの身体は激しく前後運動をし始めた。

もはやしゃぶるといふ表現すら生温かった。喉の奥、気道の直前である喉頭まで使ったチンポ扱きだ。

「はははっ！ 俺の巨根が全てミルカの中に入っているぞ！ どうだミルカ、このままチンポを飲み込みながら昇天してみるか？」

「~~~~っ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
2D DREAM MAGAZINE
2D DREAM MAGAZINE

COMIC
UNREAL
アソビファイル

正義のヒロイン
姦獄ファイル
Incest Files

あなたのキモチイをお手伝い! キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

3D 美少女 3D
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリタム120%!?
ジャンルにこだわらない
ドキドキキララ!

女刑事美優
美優は自らの身体で...

リアルドリーム文庫

あとみつく文庫

呪詛喰らい師
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプの?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めないライトノベル!

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターノンノベルズ」
から書籍化!

異世界
ドキドキ
キララ
キララ
キララ

ドキドキキララフな
ライトノベル系
ドキドキキララ!

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫